

令和4年度第1回岐阜市教育振興基本計画検討委員会 会議録

- 1 日 時 令和4年6月1日（水曜日）午後1時30分から午後3時30分まで
- 2 場 所 岐阜市役所庁舎6階 6-1大会議室
- 3 出席委員 玉置委員、尾関委員、青山委員、荒木委員、樋田委員、
長谷川委員、広瀬委員、福地委員、松岡委員
- 4 説明者 水川教育長、佐藤事務局長、杉原次長兼教育政策審議監、野田次長兼教育政策課長、
(事務局) 寺田教育統括審議監、吉元学校教育デジタル化推進審議監兼学校指導課GIGAスクール
推進室長、星野義務教育審議監兼学校指導課長、児山教育政策課主幹兼教育政策係長、
横井教育政策課副主査、櫻井教育政策課主任、山本教育政策課主任
- 5 次 第
- 1 開会
 - 2 教育長あいさつ
 - 3 委員紹介
 - 4 委員長・副委員長の選任
 - 5 事務局説明及び審議
 - 6 その他
 - 7 閉会

○野田次長兼教育政策課長 それでは、定刻となりましたので、ただいまから令和4年度第1回岐阜市教育振興基本計画検討委員会を開催いたします。着座にて失礼いたします。

本日は、上松委員を除く9名の委員の皆様にご出席をいただいております。ありがとうございます。

初めに、会議資料の確認をさせていただきます。皆様のお手元のタブレット内には、次第及び席次表、資料の1、2及び参考資料1から4を収納し準備しておりますが、よろしかったでしょうか。不足等がございましたら挙手をお願いいたします。

なお、本日の会議は公開で実施いたします。本日傍聴者は2名でございます。傍聴の方は、傍聴券の裏面に記載した事項の遵守をお願いいたします。会議の円滑な運営にご協力をお願いいたします。

それでは、会議に先立ちまして、教育長からごあいさつ申し上げます。

○水川教育長 皆様、こんにちは。本日は大変お忙しい中、岐阜市教育振興基本計画検討委員会にご出席いただきましてありがとうございます。また、皆様には今後5年間の本市の教育の方向性を示す第4期岐阜市教育振興基本計画の策定にかかる委員をお引き受けいただき、重ねてお礼申し上げます。それぞれの分野でご活躍の皆様に委員になっていただけること、本当にありがたく思っております。

私は教育長に就任し2年目となりますが、心の中には、Why School、学校って何のためにあるのか、子どもたちは何のために学校へ来るのかという問いがいつもあります。

全ての国民が何の疑いもなく幼稚園、学校を通過し社会人となっていきます。そして、学校というのは1つの小社会として色々なことを学んでいく、そういう場でございます。

岐阜市はこれまで教育立市を謳ってきた中で、県平均はもとより、全国でも上位に位置する学力を誇っております。先日、英語の学力学習状況調査の結果が出ましたが、こちらにおいても良い結果を示すことができ、安堵しているところでございます。

ただ、その一方で、新しい学習指導要領も動き出し、一層の個別最適化ということを求められている中で、学校が子どもたちにとって、本当に楽しい場所になっているだろうかということに対しての疑問がございます。本市の子どもたちが将来に対しての夢や目標を持つ割合は、県平均、全国平均をなかなか上回ることができないですし、不登校も大変多い状況でございます。そういった意味で、学校が子どもにとっての真の学び舎になる、あるいは教育というものが子どもたちの大切な未来への足がかりとなるのだということを改めて考えたときに、これからの教育について、私たちが考えていかなければならないことがまだまだたくさんあると思っています。

楽しいだけが学校ではないですが、楽しくなければ学校ではない。明日もまた来たいと思える学校の姿が一番の根本、ベースに置きながら教育を見据えていきたいと思っているところでございます。

委員の皆様にはぜひとも、本市で育つ子どもたちが学校を楽しんでいると思えて、自分がこのまちで育っていくということを嬉しい気持ちで日々暮らせるような、そんな教育の在り方について、どうぞ忌憚のないご意見を賜りますよう、お願いを申し上げてごあいさつとさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

○野田次長兼教育政策課長 それでは、続きまして、委員の皆様のご紹介に移りたいと思います。事務局よりお一方ずつ、委員の皆様のお名前をご紹介します。

(委員ご紹介)

以上10名の皆様に委員をお務めいただきます。選任に係る辞令書につきましては、お一方ずつお渡しするところが本来ではございますが、時間の都合上、各委員の皆様のお手元に配付させていただいておりますので、よろしくお願いいたします。

また、各委員の皆様におかれましては、後ほどの審議事項1でのご発言の際、簡単な自己紹介を添えてご発言いただければ幸いです。

また、本日欠席の上松委員におかれましては、本日の審議事項に関するご意見を事前にいただいております。

りまして、資料中、参考資料4でご紹介させていただいておりますので、よろしくお願いたします。

続きまして、委員長、副委員長の選任に進みたいと存じます。委員会規則第5条において、委員長、副委員長は委員の互選によって定めることとなっております。いかがでしょうか。

それでは、恐縮ではございますが、事務局から委員長、副委員長の案をご提案さしあげまして、ご審議いただくこととしたいと存じますが、よろしいでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

○野田次長兼教育政策課長 それでは事務局案としましては、委員長に玉置委員を、また副委員長には尾関委員を、ご提案させていただきたいと存じます。いかがでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

○野田次長兼教育政策課長 ありがとうございます。それでは、本会の委員長を玉置委員に、また副委員長を尾関委員にお願いしたいと存じます。

ここで、玉置委員には委員長席へご移動いただくとともに、教育委員会より本検討委員会への諮問として、教育長より諮問書を手交させていただきたいと存じます。

(諮問書手渡し)

○野田次長兼教育政策課長 ありがとうございます。ただいまの諮問書につきましては、本日の会議資料2として、各委員の皆様のお手元のタブレットに収納してございますので、以降、ご審議の際、こちらをご覧になっていただければと存じます。

それでは、以降の会議進行につきましては、玉置委員長にお願いしたいと存じます。委員長、よろしくお願いたします。

○玉置委員長 それでは委員長を仰せつかりましたので、ごあいさつさせていただきたいと思います。

改めまして、岐阜聖徳学園大学の玉置崇と申します。どうぞよろしくお願いたします。さきほど受けた諮問事項について、これらの具現化に向けて十分な議論を行っていければと思います。

少し自己紹介させていただきますが、岐阜聖徳学園大学に務めて今年8年目を迎えております。その前は公立の小中学校に務め、校長や教育委員会も経験いたしました。また現在、GIGAスクール構想の具現化に向けた各自治体での様々な検討や、教育データ、校務データといったものをどう利活用して

いくかといった、文部科学省の会議にも関わらせていただいております。

冒頭、教育長からお話がありましたように、コロナ禍になり、教育長はWhy School、なぜ学校なんだというようなことを言われましたが、まさにコロナ禍で今まで当たり前に来てきたことができなくなりました。

『ビジネスの未来』という著書を書かれた山口周さんという人は、意義や目的が喪失することについて、世の中が混乱してくると今までやれていたことがやれなくなり、果たして本当にこれは意味があったことなのだろうかという問いに行き着くことを述べています。まさに今、教育長が言われたように、学校が今までどおりの教育を進められなくなった今こそ原点に戻り、こうした会議で教育について皆様と考えていく機会を得られたことを本当に嬉しく思います。皆様のご協力を得て、ぜひとも実効性のあるものを練っていきたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

では、ここからは座って進行させていただきます。では、本日は審議事項が2点ございますが、まず審議事項1に向けて、事務局より説明をお願いします。

(事務局より、審議事項①に向けて説明)

○玉置委員長 ありがとうございます。それでは、早速、審議に入りたいと思います。

今、事務局から説明がありましたが、それぞれ皆様が色々なお立場で参加されていますので、これまでの経験、日頃より教育に関わっておられる経験の中から考える、未来を生きる子どもたちのためにどんな力が必要かということ、自由にお話しいただきたいと思います。なお、子ども、学校・教職員、家庭・地域の3つの主体でそれぞれに柱建てをしていくということも少し心に留めていただきながら、お話しいただきたいと思います。

なお、最初に少し自己紹介を添えていただきつつ、まずは思いを語り合うということが大事だと思っていますので、順番にお話しいただきたいと思います。

尾関委員は副委員長を担っていただいておりますので順を最後とし、青山委員からお話しいただきたいと思います。それでは、よろしくお願いします。

○青山委員 青山です。よろしく願いいたします。私は、岐阜小学校学校運営協議会の会長をしております。もともと子どもが小学校のときに学校のPTA役員になり、その子どもは今年成人式を迎え二十歳を越えましたが、そのまま学校運営協議会に残り、地域の一員として学校に関わっております。

未来の子どもたちにどんな力を育むことが必要かとありますが、将来どうなるか私にも全く想像ができないので、具体的なことはとても考えられないですが、今、生き抜く力ということがよく言われます。私のイメージとしては、生き抜く力だと少し押しつけのようにも感じてしまうので、しなやかな力や姿

勢を身につけてほしいと思っています。

そのために何が必要かということですが、非認知能力が大切であると考えております。岐阜小学校の学校運営協議会でも、非認知能力を育んでいくためには、なるべく多くの人と出会い、多くの経験をすることが大切だろうということで、そんな思いを持って活動を構築しています。

今見せていただいた資料に、子ども、学校・教職員、家庭・地域と分かれていて、それぞれの役割も書いてあるのですが、これがとても大切なことだと思っています。今、学校はものすごく色々なことをやらなくてはならない場所になってきていて、多忙ということが言われています。私は、学校の役割、地域の役割、保護者の役割というものを、もっとしっかり分けなくてはと思っています。

私たちが学校運営協議会を立ち上げる際、一番最初に言ったことは、学校でできることはやりません、またお金を払ってやれることはやりませんということです。それは本来、市が予算化して取り組めばよいことで、私たちがその代わりになることではない。そう宣言してから、活動を始めました。

子ども中心で、子どもにとって何がいいか、子どもの成長にとって何が一番大切か、子どもの立場に立って色々と考える中で、役割を分けていく、それぞれの担うべき役割を担っていく、これが一番大切なことだと思っています。

このように分けることはいいことだと思いますし、全体像としても分かりやすいかなと思います。とにかく子どもを中心に考えて、少しずつ内容を固めていけるといいなと思っています。

○玉置委員長 ありがとうございます。それでは、荒木委員、お願いします。

○荒木委員 よろしくお願いします。私は、現在、岐阜市の小中学校でスクールカウンセラーをさせていただいています。その他にも、他市で幼児の親子教室に携わったり、保育園の先生方のコンサルテーションとして悩みをお聞きしたり、もしています。

私は、大学で特別支援教育を学び、その後、長良医療センターで発達外来や心身障害を抱える方々の日常支援をさせていただきました。そこからさらに、教育の現場で直接、子どもや保護者、先生の支援をしたいと思い、大学院に行って学び、少年センターの適応指導教室で支援員をさせていただきました。2人目を出産後、今はスクールカウンセラーの職に就いております。

私の子どもの一人はまだ小学生ですが、上手にタブレットを利用しています。他の学校を参観しますと、うまく使える子と使えない子との差がとても大きいなと感じます。先生方も、タブレットという新しい道具をためらいながらも、ちゃんと挑戦させた方がいいのかなと、とても試行錯誤していらっしゃるのがよく分かります。新しい時代がきたというか、温故知新なんですよね。何を大事にしていくのか、様々な価値観が混ざり合って難しい時代になってきたなと感じています。

また、地域のことでいいますと、PTAのクラス役員にも関わらせていただきました。何げない会話

の中で、お母さんたちの子どもへの愛情を知る機会がなり、ああこんなに子ども思いの親がたくさんいるのだったら、きっと世の中は良くなるということ、活動の中でよく感じていました。

それから、地域の方とのつながりというと、私の住んでいる町内は20世帯もないのですが、町内会長を引き受けた時には、用事でお話に行くと子どもを愛でてくださいましたし、本当にいい関係を築けています。古き良きというか、私の生まれ育った町に温かい雰囲気が残っているということを感じる機会もたくさんあります。私の両親も、見守り隊や、食育、学校で囲碁を教えるボランティアもしていました。私も、絵本の読み聞かせや、卒業生として子どもたちに話をする機会をいただき、地域の立場からも学校に関わりを持たせていただいています。

私は、今を生きる力としてとても大事だと思うのは、「一人ひとりが、未熟な自分を好きと言える力」だと思います。私達大人だって発展途上、未完成です。でも、お互いに分け合ったり工夫したりしながら、大人も子どもも「共に育っている、と感じられる力」が必要なんじゃないかなと思います。そして、毎日毎日、1日が終わるときに、ああ今日は良かったとか、ああ明日はこうやって頑張ろうとか、「一日一日を大切にできる力」というものが、育っていくといいなと思います。

子どもたちや保護者の方々の相談を聞いていると、理想の自分と現実がずれていて苦しんでいらっしゃると思うので、遠い未来や昔の良かったことではなく、今の自分の姿や存在を大事にできると少し楽になれるし、そこから意欲や憧れというものが育っていくように感じています。

○玉置委員長 ありがとうございます。それでは、樋田委員、お願いします。

○樋田委員 教育に携わる大事な会議に参加させていただくこと、本当に光栄に思います。ありがとうございます。4月より岐阜特別支援学校に参りました。これまでは中学校での経験が多く、校長となってからも3年間を中学校で過ごし、今年4年目に、この岐阜特別支援学校に参りました。

中学校での校長時代にすごく勉強になったことは、学校の教育目標について、目標というものをシンプルで、子どもの合言葉にできて、キャッチフレーズ的なものにする、本当に子どもは変わるなということ、です。

前の学校の教育目標は「自ら動く」で、コロナ禍の中でしたけれども、子どもたちは何ができるかを考えて色々なことをやり遂げました。また、この言葉が先生方のキャッチフレーズにもなり、生徒会の子どもたちのキャッチフレーズにもなり、学級の後ろの掲示物の子どもたち一人ひとりの言葉にもなっていたということが、とてもありがたかったです。こういった目指すために掲げるものは、できるだけシンプルに分かりやすく、誰もが言えるものにするのが大事なということ、を勉強しました。そういう意味では、今回、子ども、学校・教職員、家庭・地域の3つの主体に分けてあるのは、整理されていて分かりやすいと思います。

目標という話になりますと、今いる岐阜特別支援学校の学校目標は、自立と社会参加となっています。自立というのは、中学校でも3年間をかけて卒業後の進路を自分で自己決定していけるよう指導するのですが、特別支援学校は12年間をかけて自立に向かっていく、それがよりクリアに分かります。小学部の1年生の子が、おはようございますと挨拶する。その挨拶も自立に向かっていくわけですね。高等部の子が、自らの意思や理解に沿って、お願いします、これ分かりませんといったことを言えるようになる。これも自立に向かっていく立派な姿です。この一つひとつが全て繋がっているということがすごくクリアに、よく感じられる学校だと思います。

特別支援学校に通う障害をお持ちのお子さんにとって、自立には、自分で決定して主体的に生活を営むことと、障害があっても能力を生かしながら社会に参加すること、2つの意味がありますが、私は、この自己決定という言葉がとても大事だと思います。私が教員になった頃から、自己決定の大切さということはずっと言われていますが、今の時代は、昔と比較にならない位、多様な選択肢が生まれています。それゆえ、子どもたちにとって自己決定することが、逆に難しくなっているとも思うのです。

こうして学校や子どもの学ぶ姿に日々関わる中で感じることにについて、よく考えながら、その答えを探しながら、子どもの指導にあたっていきたいと思っています。

○玉置委員長 ありがとうございます。それでは、長谷川委員、お願いします。

○長谷川委員 岐阜大学教育学部の長谷川と申します。よろしく願いいたします。まず、岐阜市の今後5年間の教育を考えていくこのような重要な会議に参加させていただき、感謝申し上げます。

私は、教育学や教育社会学という分野を専門にしております。教師教育、先生たちの学びや育ちというものをどのように実現していくのかというところに、研究のテーマを置いております。

また、先ほど玉置先生もおっしゃったとおり、最近はエビデンスベースドの教育というものが非常に求められていまして、データを分析することで、教育政策あるいは教育実践を検証し改善していくことが非常に重要視されております。そうしたデータ分析なども私の研究分野でありまして、他自治体の教育委員会において、こういったデータ分析や評価のお仕事もさせていただいております。

こうした私の専門、私自身がこれまで研究してきたことを少し踏まえながらお話させていただくと、やはり今、教育政策として個別最適な学びというものが、特にGIGAスクール、ICTの活用によってかなり進んできています。

そうした個別最適な学びによって実現されていくような、個性であったり、個に応じた学びをどうつくり上げるかというところは、現在の教育政策の中で、あるいは学校の先生方の実践の中で、非常に一生懸命やっただいていただいているのではないかと考えております。

ただ一方で、幾つかの自治体でこういった場で議論させていただく中で、結局、そこだけを追い求め

ていくと学校は要らないですよという話になりかねない。あるいは、そこによって基礎学力を身につけるノウハウについては、実は学習塾が強いのです。AIによって学習塾、教育産業というものが個別に応じた、いわゆる認知的な能力を伸ばすというノウハウを非常に持っているわけです。

だからこそ学校という場所は、当然そういった認知的な能力を個別に応じて学んでいくことも重要であるとしつつ、やはり他者と協働する、信頼を築き合うというところを、どう学校教育として実現していくか。私は、ここが非常に大事な点ではないかと感じています。

現在のコロナ禍において、学校教育が停滞してしまうという危惧に対し、多くの自治体の首長、教育長は皆口を揃えて、コロナによって学校を、学びを止めないとおっしゃるわけです。それは、やはり学校教育の意義というものをそこに込めておられるわけです。

ですので、やはり子どもたちが集う場である学校というものの意義が、こうしたコロナ禍やあるいはICTの普及によって、改めて問われていると認識しております。

私は、学校が何ができるかというところが、これからの5年間の教育を考えるうえで、まさに重要なテーマになってくると思っております。そのときに、ではどういう力が子どもたちに必要か考えると、他者との協働や信頼を築く力であって、それは単に合意形成をしていくだけではなく、その前の自己の選択や行動というものを互いに認め合うというところが、やはり重要だと考えております。

そうしたとき、基本理念に書かれている一人ひとりが価値ある大切な存在として認め合う教育というものが、非常に大事だと思っております。一人ひとりの選択や行動を尊重しつつ、それを互いに認め合う集団をつくる。今、学校教育においてこれが重要なことではないかと考えています。

○玉置委員長 ありがとうございます。それでは、広瀬委員、お願いします。

○広瀬委員 加納幼稚園園長の広瀬と申します。このような重要な会議に参加させていただくということで、今とても緊張しております。どうぞよろしく願いいたします。

初めに、ちょっと自己紹介をさせていただきますと、私は学校を卒業した後、私立幼稚園で5年間勤務させていただいた後に、現在の公立幼稚園で勤務させていただいております。そしてこの4月より、加納幼稚園の園長としてお世話になっております。

3月末までは子ども・若者総合支援センター エールぎふで勤務しており、今年3年振りに幼稚園に戻ってまいりました。幼稚園に戻ってきて、春にはこいのぼりの歌を歌ったり、園庭にこいのぼりがあつたりと、まさしく四季を感じながら、そして子どもたちの姿に改めて新鮮さを感じながら、生活させていただいております。

未来を生きる子どもたちにどんな力を育むことが必要かということですが、私は今、幼児に携わらせていただいているというところで、やっぱり自ら様々な事柄や物事に対して自分から関わろうとする力、

また自分で考えて行動する力というものを育てていく必要があるのではないかと思います。

大人に与えられた課題をこなしていくのではなく、面白そう、やってみたい、触ってみたい、これ何だろうというように、主体的に心を動かしながら遊んでいく中で、次はどうしたらいいだろうかと考えを巡らせ、行動することが大切だなと思っています。

先日、園児たちが砂場で大きい山を作っているとき、どうやったら山が大きくなるか、ただのさらさらの砂だとうまく作れないのは当然です。すると誰かが、水を運んできたらいんじゃないかと言い、水を使って作り始める。すると、今度は水をかけ過ぎてまた山が崩れてしまうので、次は水の量を調節することを考える。このように、子どもたちは自ら工夫しながら遊んでいました。

他にも、樋で水を流すのも、どうやってやったらうまく流れるだろうか、高低差をつけたほうがよいのではという考えが子どもたちから出てきて、ビールケースを持ってきたり、バケツを使って坂を作ったりと創意工夫する姿が見られました。そうやって、自分の中でどうしていったらいいのかを考えていく力というのは、とても大事じゃないかなと思っています。

また、様々な人との関わりの中で、自分を信じること、相手のことを思いやることができるような自己信頼感、人への信頼感というものを育てていけるといいなと思っています。

自分を駄目だというのではなく、私ってこういうところがちょっといいな、こういうところがちょっと得意だよ、こういうことが大好きなんだという、自分自身を知り、自分を信頼する、自分を信じる力、また、友達のこういうところが素敵だなと認める力、知る力、そういうところも育てていくことは大事だと思っています。

小学校の学びを前倒して、文字や数を学ぶということではなく、本当に幼稚園の毎日がとても楽しくて土日にも幼稚園に行きたいと思えるぐらい、とことん遊び込むような教育を通して学ぶ力の基礎を育てていくことが、幼児期には大事だと思っています。

○玉置委員長 ありがとうございます。それでは、福地委員、お願いします。

○福地委員 お願いいたします。岐阜聖徳学園大学から参りました福地と申します。私は、岐阜県で38年間教職員を務めさせていただいて、そのうち23年が学校現場、15年が教育行政です。23年のうちの6年間は、岐阜市でお世話になりました。現場にいるときは、現場の山積した課題を解決する手がかりは、現場にしかないという自負心がある。ところが教育委員会へ行くと、今度は俯瞰的な視点や学校の統括的な役割を求められ、スタンスの軸足をどこに置くかについて考える、色々な経験をさせていただきましたが、最後に、中学校の校長を3年間やらせていただきました。

非常に思い出深い3年間で、そのときに思ったことは、私が教頭だった頃と比べると、子どもたちは皆整っていて、落ち着いていて、本当に美しいのです。

でも、思ったんです。この教育でいいのかなって。つまり、本当に一人ひとりの鬱積した思いや、何か子ども同士は折り合いをつけながら、表層的に仲良く上手くやっているように見えるのだけれど、非常に疑心暗鬼で、心の中は荒んでいる部分がないのかなって、それを見せてこないところに違和感を持ち、当時の教育への疑問を感じていたのも事実です。私の退職後、さらに各学校現場はコロナ禍に見舞われ、もし自分がそこで引き続き校長をやっていたとして、何ができたか分からないですが、そうした課題意識を持って、現場を終えました。

何か折り合いをつけると言う聞こえはいいですが、考えない子どもを育てて、主張しないというところに美しさを見出しながら、子どもたちが静かで安定している学校がいい学校だと考え、それを自分たちの自慢にしていないか、そのことを疑問に思っていました。

次に、現職では何をやっているか言いますと、一昨年、縁あって岐阜聖徳学園大学に入り、就職課長を2年間務めさせていただきました。教育学部360人位の学生のうち300人弱を学校現場へ教員として送り出していました。

学生たちは本当にこよなく教員になりたいと言うのです。なぜかと聞くと、ほとんどの学生が心の中に、小中学校時代の原風景を持っているんですね。例えば、岐阜市の学校でいうと、それこそ金華山登山をやって、そのときの先生のあの言葉だとか、あるいは自分が本当に塞ぎ込んでいるとき、何で自分が図書館にいることを先生が知っていたのかは分からないけれども、ただただ隣に寄り添って気持ちを聞いてくれた、それで命を救われたという経験だとか、部室に貼ってあったあの言葉が今の自分の教訓になっているだとか、そんなエピソードがあるわけです。明らかに義務教育が大人になっていく若者たちの心の原風景としてあり、私はぜひこの学生たちをもっと育ててあげたいし、立派な教員になってほしいと思い、今は教える立場として、学生に寄り添いその学びを支えたいと思っています。

ただ、そのときも思ったことは、やはり学生たち、特に岐阜県の学生たちは非常に内向きだなということ。私は、仕事で他県の色々な自治体に行き、そこで学生や教育委員会と話す機会も多いですが、どうもやはり岐阜県の教育の気質として、一体感を醸成することは得意だけれど、皆で同じことを一緒にやっ行ってこうというところで何か思考を止めてしまっているところがあるように感じています。そうした中で、今までの自分たちの教育はどうだったのかということ省みています。

だから、中学校での校長経験と、大学での学生支援の経験をつなげてみると、まさに今、自分たちがやってきた教育をアップデートするのではなく、一回リセットし、リビルドしてみるチャンスではないかと思っています。何か、変化の兆しや新しいベクトルを教育委員会から学校現場へ、先生方へ送ることが必要ではないかと思っています。

岐阜市の教育大綱などを見させていただく中で、国の方針も踏まえて言葉もしっかり練られているし、輝かしいというか、未来が見える非常にすばらしいものだと思うのですが、実際問題として、ではなぜ不登校がそんなに増えているのか、本当に一人ひとりの子どもたちが明るく夢を持ち、自信を持って伸

びやかに学校生活を過ごせているか、課題もあるように思います。一人ひとりが深い愛情に包まれて、優しい眼差しの中で自己決定、自己判断していくベースになるような柔らかい心みみたいなものとか、伸びようとする、そういうチャンスがふんだんにあるような柔軟な教育制度とか、そういったことも今議論してみるチャンスではないかなということを考えています。

○玉置委員長 ありがとうございます。それでは、松岡委員、お願いします。

○松岡委員 岐阜市PTA連合会の松岡です。私は、今まで幼稚園、小学校、中学校においてPTA活動に携わっていると同時に、読み聞かせなどの学校ボランティアとしての活動、放課後学びの部屋のサポーター、それから、図書室ボランティアとして、朝、先生の代わりに図書室を開けて貸出しを手伝ったり、図書室の配架や飾りつけを行ったりしてきました。

その他、現在は民生主任児童委員としても関わらせていただいています。親と子ども、先生と生徒という上下の関係ではなく斜めの関係、地域の大人と子どもというような関係で、これまで関わってこれたかなという思いはあります。

こうして色々に関わりを持つ中で、少し気になるというか、少し頼りなく感じていることは、子どもたちのすぐ答えを知りたがる場所、過度に失敗を恐れているところがあることです。

具体的なお話をしますと、昨年、小学校5年生の子どもに絵手紙を教える機会がありました。ある方に講師をお願いし、私たちはそのサポート役だったのですが、先生が教える手順や見本を見せて、じゃ自由に書いてみようとなったとき、子どもたちが口々に、次は何をしたらいいのとしきりに聞くのです。

絵手紙の線ってちょっと墨汁を水で薄め、薄いグレーにして描くというポイントがあるのですが、先生、濃さはこれでいいのって、ここでもしきりに聞いている。講師の先生も好きに書いていいよと言うのですが、その後も、この角度でいいの、大きさはこれでいいの、と何でも全部聞いてしまう。

どの子ども、こうやりなさいというのはできると思うんですが、自由にやればいいよと言われると、何をしたらいいか分からなくなるというのです。ここからは憶測ですが、失敗したくない、変なふうに描いて笑われたくないという思いが先立って、確かな指示がほしい、答えがほしいとなってしまうのだと思います。

今回の審議事項1、未来を生きる子どもたちのためにどんな力を育むことが必要かということですが、私は地域の大人として子どもたちと関わっている経験を踏まえて考えると、やはり上手くできなくてもリカバリーする力といますか、失敗は当然しますし、逆に失敗しないと覚えられないこともたくさんあると思うのですが、そこから何とかなる力、もし失敗しても次はどうしようかなと、そうやって挽回する力、失敗しても大丈夫、次があると思える力を育てることが大事ではないかと思っています。

○玉置委員長 ありがとうございます。では最後に、尾関副委員長、お願いします。

○尾関委員 今回、副委員長を仰せつかりました濃飛倉庫運輸株式会社の尾関と申します。自己紹介とともに、自分がこれまで教育に関わってきたこと、それから企業経営者の立場から、企業から見た今の若者たちの姿、社会が求める人材についても少しお話しできたらと思っております。

まず、私の自己紹介ですが、今年53歳になり、県外で過ごした一部の期間を除き、ほぼ岐阜市で過ごしてまいりました。子どもが3人おまして、上の2人は大学生、一番下の子が中学生です。皆、岐阜市で育ちましたので、私自身も何か岐阜市の教育のためにお役に立てればと思っております。

一番下の子の小学校時代には、校区のPTA役員をさせていただきました。当時の痛ましい事案があった隣の校区でしたので、私たちも重く受け止め、二度とこんなことがあってはならないという思いと同時に、今まで自分が教育にあまり携わっていなかったということを反省しながら、様々な活動に携わらせていただけてきました。

企業のお話に移らせていただきますけれども、濃飛倉庫運輸株式会社は、その名のとおりに物流の会社です。世の中ではエッセンシャルワーカーということで、物流が止まると世の中の物も止まるということで、皆様からも評価をいただいておりますが、一方で、トラックというのはどうしても交通事故の第一当事者になるケースも多く、そういった側面も持つ職業でございます。

ここ岐阜市に本社を構えて106年目ということで、岐阜市のために企業人としても何かしたいなと思い、今回お話をいただいて、即了承をさせていただいたというのが今回の経緯でございます。

その中でも、社会において企業がどんな人材を求めているのか、あるいは、今それに対して人がどんな状況になっているのかということを少しお話しさせていただきたいのですが、まず、DXあるいはICTが世の中を席卷しており、仕事の効率を考えると、システム化、ロボット化が進んでおります。

しかし、それを開発していくのは当然人でございますし、それを使っていくのも人だと思っております。また、物流という仕事柄、まだまだ人と人が対峙することが多い職場でございますので、私どもの企業としては、ICT活用、効率化は進めていくものの、人というものを基軸に考えて、企業運営をしてまいりたいと考えております。

そうした中で、採用活動など色々な機会を通じ、今の若い方々を見ていて、非常に御批判をいただく発言になるかもしれませんが、やはり少し打たれ弱いところが垣間見えるというのが正直なところでして、また松岡さんが先ほどご発言されたことに同意で、もしかしたら成功体験が少ないせいなのか、人の目、人の意見をすごく気にする傾向を持っておられるように思います。ですから、自分がこうしたいということではなく、周りはどうしているんだろうというようなことで、一歩がなかなか出てこないような感じを受けますので、私としては、教育現場に関しては、やはり成功体験を積みせる、失敗を許容するということが、非常に大切なことではないかと思っております。

また、それをするためにも、ワクワク感というか、幼稚園、小学校の頃の目がキラキラした、何か楽しみたい、楽しんでいるよという純粋な思いがいつの間にか消えてしまっているような気もします。

だから、そういったワクワクが小学校から中学、高校、大学へと持続していく、そんな教育の姿をつくっていただきたいなと思っております。

○玉置委員長 ありがとうございます。皆様、本当に思いを大きく語っていただきましたので、これらをぜひ念頭において、計画にも反映していければと思います。

改めて言いますと、事務局の提案資料のとおり、教育大綱の基本方針とともに、子ども、学校・教職員、家庭・地域それぞれの目指す姿、これらを計画の理念・基本姿勢としていくということについては、皆様にご賛同をいただけたかと思っております。

皆様のご提案を私なりに、少しキーワードで振り返らせていただきますと、もっとたくましくなっている、失敗を恐れないでほしいという話がありました。

最後、尾関委員が、目がキラキラした姿とお話になりました。私がかつて校長だったとき、うちの学校を見られた外部のある方の言葉で、今も忘れられない言葉があります。その方は、この学校の子どもたちは目がキラキラしていますとおっしゃいました。私は、褒められて嬉しいなと思っていたところ、だからいけないんですと言われました。これからの子どもは、目がギラギラ、もっといい方法はないのか、もっといい考え方はないのか、もっとさらに練り上げるものはないか、そういう姿勢がこの学校には足りないのではと言われたのです。そして次の年に、私はキラキラ授業からギラギラ授業というキーワードを作ったという思い出があります。それはさておき、皆様からは、主体性や自己決定することの大切さについて、多くの言及をいただきました。

それから、個別最適化において、その土台としてあるべきは、お互いを認め合うことであるというご意見をいただきました。私も、長谷川委員と同じように思っているのですが、先生方が個別最適な学びを子どもたちに用意したのでは、私は駄目だと思います。最終的には、自分で個別最適な学びをつくっていく子ども、そういう意見もたくさんあったと思いますが、それがまさに主体性ですね。

これまで歩んできた教育をさらにバージョンアップする、一方で抜本的な考え方のリビルドも必要であると、そういったレンジを広く捉えて今後の教育の方向性を考えていけると良いという趣旨のご意見がありました。またメッセージとして目指すものはシンプルにまとめていく、浸透させるうえにおいては、その視点が大事ではないかというお話もありました。

今、キーワードをいくつか振り返らせていただきましたが、非常に示唆に富む計画の土台になることを言っていたのではないかと思います。

以上、審議事項1はこれで終えさせていただき、続いて審議事項2に移りたいと思います。それでは事務局より、説明をお願いします。

(事務局より、審議事項②に向けて説明)

○玉置委員長 ありがとうございます。それでは、私からもう一度整理します。17ページをご覧ください。今日の2つ目の審議事項は、この図の右側、教育目標につながるご意見を委員の皆様から改めていただきたいということです。子ども、学校・教職員、家庭・地域の目指す姿をより具現化していくために、もう一段階踏み込んで、委員の皆様が掲げるべきと考える目標を形作っていくためのアイデア、素案を出していただき、それをまた事務局が参考にし、次の提案につなげていきたいというわけです。

改めて、これから岐阜市が取り組むべき5年間の教育の基本的方向性と施策ということですから、どういった基本目標を掲げることが必要か、できれば子ども、学校・教職員、家庭・地域の3つそれぞれにご意見いただければと事務局よりお願いもございましたし、より多くのご意見を出していただくことで今後の提案にも寄与できると思いますので、ぜひその点も踏まえてお話しいただければと思います。

先ほど順番にと申しましたが、自己紹介も済みましたし、指名いたしませんので、どなたかにぜひ口火となるご意見をいただければと思いますが、いかがでしょうか。荒木委員、お願いします。

○荒木委員 私からは、5つのことをお伝えさせていただきたいと思います。

その前提として私が想像したものは、里山のような家庭環境、学校環境があり、そこで育つ生き物がまさに子どもたちである、そういったイメージを想起しました。例えば、森一つとっても多種の樹木があるように、多様な、色々な環境の中に多様な生き物が共存し、また季節により各々が様相を柔軟に変えていく、私はこれからの教育の在り方としてそんなイメージを抱きました。

話は戻りまして、まず1点目です。先ほど申し上げた自分を好きになれるというところから、性教育、ジェンダー教育をもう少し充実させられないかと思います。

人目を気にし、失敗を気にする子どもたちなので、それならば、そんな自分をもっとしっかり見つめ直してみたらどうかと思います。自分に向き合う、しっかり他者を知る、認め合う、そういう視点から、性というのは何もセックスのことを教えるわけではなく、コミュニケーションの一つとしての自分の体のこと、相手が何をしたら気持ち良くて、何をしたら不快な思いをするのかを、ちゃんと話し合えるといいのではないかと思います。

ジェンダーという点では、男、女ということだけではなく、あなた自身は何を自分らしさとして大事にしているのかを学べると良いのではないのでしょうか。

2点目は、キャリア教育です。例えば、現在も二分の一成人式などの取組みがありますが、どうしても何か一つの将来の姿にならなくてはいけないというプレッシャーが大きく、私にはなりたくないものがないんだけど、どうしようという相談を、子どもたちから時々受けます。なりたくないものがない自分を駄目

だと思ったり、なれそうにもないのにこんなことは言えないと考えたり、辛そうにしている子どもたちの姿があるわけです。

現在、私のように職を転々とする者がいるように、一つの願いが絶対に叶う、叶えるべきという世の中では決してないので、もうちょっと見方を工夫して、今に合わせたキャリア教育ができたらいいのではないかということを思っています。

3点目は、学校の先生方に関することです。先生方は本当によく勉強されているなというのが私の印象です。でも、そこにはやはり限界があるので、もうちょっと他の学校スタッフも交えて皆で話し合う機会があればよいのになということを思います。先生方が全体の授業を進めている中で、ハートフルの先生方が個別の支援もされていますので、そこでの観察の様子や、集団と個別での子どもの様子の現れ方の違いなど、もう少しゆっくり話し合っただけ合えたら、何か開ける指導の方法もあるんじゃないかなということを思います。

先生方自身の研修も、学びの共同体といいますか、互いに発言をし合う研修でなければということを思います。子どもたちが主体的な意見を出せるように授業を行うには、やはりご自身が主体的に意見を言ったという体験がなければ、それを教える、実践するのは難しいと思います。授業でどうしたら、子どもたちは喜んで意見するだろうか、どういうときに意見が言いにくいのだろうか、これら実践のノウハウを学ぶ機会を得るためにも、職員研修の在り方というものを工夫すると良いのではと思います。

4点目は、そういう点でも、子どもたちを観察する時間が十分あって、そして、成長を慌てないで、今、この子はこの辺のところにいる、これができる、これはできないということを、しっかり私たちが受け止めることができると良いなと思います。ひとりひとりの子どもと向き合っていく中で、何を必要としているのか、丁寧に見ていくことができるのではないかと思うのです。時々、科学館や歴史博物館などのイベントにも行かせていただくのですが、そこでの緩い感じの学びの進め方がとても面白くて、急いで気づかなくてはいけないのではなく、ゆっくり、ゆっくり考えながら、周りを見ながら学んでいる。その際の子どもの変化をすごく面白いと思うし、そういうところが素敵だなと思います。子どもたちの姿をゆっくり観察し、そのペースに合わせた学びの姿をつくっていくことが必要なのだと思います。

5点目、最後にデジタル機器の使い方について、現在は、こんな使い方ができるということはとてもやっていると思うのですが、誰のために、どんなふうに使ってもらいたいのか、例えばプレゼンテーションの作り方とか、何をどのようにもっと見やすくすると、私が考えることを相手にしっかりと伝えられるかというような、誰かに向けた、相手を考えたデジタル機器の発展ができるの良いということを思いました。

○玉置委員長 ありがとうございます。非常に多岐に亘って、重要なご意見をいただきました。

キャリア教育の重要性について、かつては進路指導と言われていたものがキャリア教育へと幅を広げていき、今では幼少期から大人まで、生涯をかけてキャリア教育が必要だと言われるようになりました。

しかし、実際の取組みとして今後具体的にどうしていくと良いのかというところは、まだ行き詰まっているところもあると思いますので、目標に掲げながら進めていく必要性も考えられると思います。

それでは、長谷川委員、お願いします。

○長谷川委員 まず、子どもについてですが、先ほど申し上げたように、個別最適というか、個に応じたというところ、個性を大事にしていく、あるいは自身の考えや選択の幅を広げていくというところは、非常に重視されているのですが、一方で、学校という場に集い、子どもたちがどういう姿になっていくのかというところの観点が少ないのではと感じています。キーワードで言いますと、協働、信頼の構築といったものが、もう少しあってもいいんじゃないかなと思うんですね。個別最適とともに、協働的な学びというものが結びついていく、個別に学びを進めながら、いかにそれを協働化していくというところの観点があってもよいのではと思うところです。

先ほど、荒木委員がおっしゃったキャリア教育もすごく大事な視点だと思うのですが、結構この個別最適や選択という姿自体にキャリア教育的要素といいますか、つまり、学びたいこと、やりたいことを自分たちが考え、選択できる機会を増やしていく、あるいは自らの学びをつくっていくことが、まさに今広義に捉えられているキャリア教育のすごく重要な肝だと思うので、この辺りをしっかりとキャリア教育として位置づけていくというところが、一つポイントとしても必要かなというのはお話を聞いていて思いました。

次に、学校・教職員について、今回、教育委員会の役割というものがどのように示されるのかなと見ていたのですが、やや抽象的で、ここをどう具体化していくかというところがポイントになるかと思えます。学校支援機能等のさらなる強化とは、一体何なんだろうかと思うところもあって、教育委員会がまさに教育行政として果たす役割というものは非常に大きくなっていると、私は個人的に認識していますので、教育委員会がまさに学校や先生方をどう支えていくのかというところは、ぜひ少し踏み込んで議論をしていただきたいなと思います。

あと、どうしても働き方改革と言いますと、時間を減らしたり、子どもと向き合うということを強調されがちなのですが、やはり先生たちのやりがいであったり、働きがいであったり、あるいは教員としての使命というものに基づいて、働き方改革は議論されるべきだと思います。単純に時間を減らしました、それが子どもと向き合う時間になりましたではなくて、やはり先生たちがやりがいとか働きがいを持って、生き生きと子どもたちを育てる、そういう営みをするところができるということが言葉として入ってこない、単純に数値目標を満たしたからいいですよというだけの話になりかねないと思いますので、その辺りを含めていただくとよいのではないかと思います。

家庭・地域の姿についてですが、非常に難しいのは、現行計画を見ても思ったのですが、家庭というところにどこまで言及できるのかというところです。この中でも、確かに家庭は全てに関わるといえば関わるのですが、家庭への役割分担ということの難しさをやはり思いつつ、今回、新しく家庭・地域という柱を立てるのであれば、計画の中に、家庭の教育的な役割をどう書き込むのか、あるいは書き込まないのか、この辺りを慎重に、場合によっては大胆に議論しなければいけない点かなと思いました。家庭というところをどう位置づけるかというところは、少し気になるところです。

○玉置委員長 ありがとうございます。働き方改革を話題にいただきました。時短主義で走り過ぎて、本当に何のためにやっているかというのが失われつつありますし、やはり普段から協力し合い、協働が体现されているような、まさに教職員の同僚性が高いところは、働き方改革が進むのではないかと感じました。重要なお発言をいただきました。

それでは、松岡委員、お願いします。

○松岡委員 私は、家庭・地域の観点を中心にお話ししたいと思います。

家庭って、本当に様々です。子どもの学びに一生懸命な家庭だけでなく、親さんのお仕事が忙し過ぎて余裕を無くしているような家庭もある。そうすると、そのしわ寄せが子どもにいき、やはり家で辛い思いをしている分、学校でそれを発散させてしまう子もいるように見受けれます。

だから、やはり教育だけで家庭を何とかするのはすごく難しいかなというのは思っています。本当は、教育だからもう教育だけで抱え込むのではなく、生活の中に教育もあるのだから、福祉であったり、生活を担当する部署ともちゃんとつながってやれるといいなと思うのです。不登校の子どもの話を聞くと、ちょっと家がしんど過ぎて、とても学校に来れない。ヤングケアラーという言葉がありますが、家でちょっと家族の介護をしていたり、下の子の面倒を見ているから来れないといったことも聞くので、そうすると、やっぱり教育の手だけではなく、もっと行政の違うところからの支援の手がすごく必要なんです。他の部門とも連携していければ、救っていける子もきっといる。民生委員の立場で色々とお話を聞いている中で、そういうことを本当に思います。

それから、子どもの居場所としてのサードプレイスの充実について、こういった場所は結構あると思うんですよ。NPO法人でそういう子どもが来てもいい場所を作ってくださっていたり、児童館であったりと場所はあるんですが、かといって、じゃ行っていいよと言えば子どもがすぐ行くかということ、実際に行くまでにはなかなか及ばない。それはなぜかと考えると、その場所を知らない、そこにどんな人がいるのか分からないということがあのかかなと思います。

私は、何回も読み聞かせのボランティアや、朝の図書館にも毎週行っていますので、1週間のうち1日は必ず子どもと顔を合わせていますが、子どもにとっては結構、大人の顔を見分けるのが難しいみた

いで、あまり覚えてもらえないんですよね。やはり顔を見るだけじゃ駄目で、ちゃんと話したり、一緒にそれこそ作業をやったりすることで、やっとお互いのことも分かってくるところがあるのです。私たち大人だって、正直子どもを見分けることは難しいなと思うところもありますが、ただ面倒を見るだけじゃなくて、ちゃんと一緒に作業したり、関わりを持つ中で分かってくるわけです。そういった顔見知りの大人をたくさんつくるのが大事なのかなと思っています。

コミュニティ・スクールでいいますと、私の子どもが通っていた小学校では芋掘りの活動があり、サツマイモを育て、収穫し、焼き芋をやるという一連の流れが何年か前から恒例となっています。そのお手伝いに来てくれる地域のおじいちゃん、おばあちゃんもたくさんいるのですが、子どもたちはそれがどこの誰かというのを分かたり、覚えたりできているのだろうか、思ったりします。

本当は、もう少し深く関われる、例えばゆっくりお話ししながら掘ったり食べたりして、顔見知りの大人が子どもたちに増えていくことで、いざ何かあったとき、ちょっと親にも言えない、先生にも言い辛いつとときに、そうした顔見知りの大人に打ち明けてくれるといいなと、経験から思います。

例えば、年齢関係なしに皆が一緒に活動できるサークル活動を通して、顔見知りの大人をつくるとか、そういうのがいいかなとは思いますが、どうしても大人と子ども、それぞれ活動が分かれているのでなかなか難しいのですが、子どもはスポーツ少年団のコーチをやっているお父さんにはすごく懐いたりということもありますので、何とか自分とつながる大人を増やしていくことが大事だと思っています。

○玉置委員長 ありがとうございます。ご経験から、家庭という言葉が意味するものは非常に広く、先ほど長谷川委員からも家庭についてどこまで踏み込むのか、どう捉えるかというご意見がありましたが、そこにもつながる一つの示唆であったなと思います。ありがとうございます。

それでは、尾関委員、お願いします。

○尾関委員 私は冒頭申しましたとおり、企業の立場から見たこれからの社会を生きる人々に求められる姿、そして子どもの教育について、少しお話しさせていただきます。

先ほど、心の安定や強さのようなことに少し触れましたが、心身の健康とよく言われる中で、例えば心が健康だ、豊かだというのはどういうことを言うのだろうか、改めて思うのです。そして私自身はやはり、何か楽しみがあったり、あるいは誰かのために自分が生きている、誰かのためになっているという思い、そういったものが自分の中に形成されることで、きっと身も心も豊かになっていくのではないかと考えています。

以前ですが、私の子どもたちが学校の課題か何かで、お父さんの仕事について調べるレポートを書いていたことがあり、私に対してどんな仕事をしているのか、社長の仕事とは何か、そもそも物流とはどんなことをしているのか、そんなところから色々とヒアリングされた覚えがあります。

そうして、身近な大人がこんなことをしている、こうして誰かのためになっているということを見聞きし、色々と考える。それをさらに、学校の中で皆と考えたり意見し合うことで、自分の中での深い理解や実感の伴う学びにつながっていくのではないかなと思います。

先ほど、二分の一成人式のお話がありましたが、私が参加したときも、子どもたちはユーチューバーになりたい、あるいはeスポーツをやりたい、デイトレーダーがいいなど、まさに多様な将来の姿を語ってくれました。私はこれらを否定するつもりは全くないですが、でもやはり少し立ち止まってほしい、ただ夢という意味で、お金が稼げるから、楽しく儲かりそうだからではなくて、そこにやはり人のためになっているのか、心の豊かさにつながるそういった思いを学校教育の学びの中から導き出し、育むことができればよいなと思っております。

今、岐阜市では、様々な業種の仕事紹介を載せた児童生徒向けの冊子を、学校で活用されていると聞いております。そこに私どもの会社も入れさせていただいているのですが、冊子を渡して先生方が説明するだけでなく、学校の先生や保護者も巻き込んで、これらの企業の方々や経営者と話す機会を作り、企業のリアルを伝えたり、共有できたらいいのかなと思います。さらには、それを持続的、継続的に幼稚園、小学校、中学校へとつながったものにしていければ、よりよいものにしていけると考えています。

○玉置委員長 ありがとうございます。今、尾関委員のお話を聞きながら、かつて、役立ち感は生きがい感、誰かに役立っていると思うとファイトが湧くというスローガンを作り、学校経営を進めたことを思い出しました。子どもたちだけではなく、地域も家庭も、誰もがその思いを共有しながら、皆で教育を担い、築いていくことの大切さを、改めて感じさせていただきました。

それでは、樋田委員、お願いします。

○樋田委員 先ほど、人の目を気にする子どもの姿のお話がありましたが、コロナ禍で不登校の子どもが増えてくる中、ある子は、教室で皆とマスク越しに目線が合うと少し落ち着かなく感じると言っていました。かつては机を囲んで交流したり、お互い意見を言ったりしていた頃があったので、コロナが子どもの心にもたらした影響は大きいということを、衝撃とともに思ったことを覚えています。

もう一つ思うことは、実に子どもたちは多様だということです。私たちが、教室を回って子どものノートを見てみると、本当に面白い意見がいっぱいあって、先生これをぜひ拾ってあげてと思うんです。こんな鮮やかな、面白い意見がある。正解じゃないかもしれないけど、面白い発想がそこにある。それらが光を見ぬまま流れていくという、本当に悔しい思いを何度もしてきました。

今はICTを使い、皆の意見を電子黒板で一斉表示し共有するなど、全員の意見を大切にすることを表現しています。皆が書いた言葉を見て思うのは、皆一人ひとり違う。だからこそ、あれもありなんだ、これもありなんだ、じゃあ私もこうでもいいんじゃないか、そんなふうに認め合ったり、楽になれるこ

ともあるのではないかと思います。

多様性を認めようという言い方だと少し難しく聞こえるけれど、これから先の人生、その時に自分が思ったことや考えがもしかしたら次のことにつながるかもしれないし、こんな変化の大きな時代ゆえ、人と異なる視点を持った意見にこそ、何か可能性が見出せるかもしれないわけです。そういうことを思うと、子どもたちの発想力というものは本当にすごいし、私たちがその多様な声を受け入れて広めることで、子どもたちをさらに広い視野に、思考に結びつけていかなければいけない、そう思っています。

もう一つあるのは、中学校の子どもたちが土曜日の教育活動を休むとき、公欠届というものを出すのですが、その理由を見ると本当に多彩で、馬術、ビームライフル、もう本当に様々な活動の場があって、人生を楽しんでいるのが分かるのです。それをやめてまで学校に来なさいとは、私はとても言えない。それはぜひ行ってくださいと思っています。こういったものを、学校を休んで行くという心持ちではなく、そんな楽しめるものがあるなんて素敵なことじゃないかと、教員が心からそう思って応援し、子どもたちにも胸を張って活動してほしいということをすごく思います。そもそも制度の考え方が古いと思いますし、子どもが選択する多様な姿として認め合うということをやっていきたくと思っています。

学校に関しては、やはり働き方改革がとても大きなポイントになると思います。本校も大変忙しいところで、特別支援のための必要な研修も非常に多いです。今話していることは、研修だから先生方に集まってくださいと言うと、もちろん時間が増えてしまうので、例えば、農林高校の先生を講師に迎え子どもたちに教えていただく機会を、同時に先生の研修にも位置付けて一緒に学ぶ。こういった研修ならば、本当に先生も学べるし、子どもも学べるし、ウィン・ウィンじゃないかと思うのです。こんなことを今考えていますが、研修の持ち方として、基本は自分が実際にやってみる、体験してみる、行ってみるということが大切だと思います。他の学校の先生が本校に来て、うちの学校で実際に教える機会を実践研修として位置づけるようなアイデアなども、どんどん進むといいなと思います。

最後に、家庭についてですが、サードプレイスの存在はとても大事だと思います。本校は、朝9台のスクールバスが来ますが、帰りは4台で帰ります。保護者の方が迎えに来られたり、自分で帰る子もいますが、放課後デイサービスの方が迎えに来られる数がとても多いです。子どもたちは、学校で先生と関わり、放課後はデイサービスでまた違った大人と関わり、私たちが思う以上にたくさんの自己決定や人との関係を築いているのだなと思います。こういった場所も、本校の子どもたちにとっての大事なサードプレイスだと思っています。

○玉置委員長 私も学校現場を見ていると、本当に子どもの力は無限大だと思います。子どもの可能性をある面ではもっともっと伸ばしていける、そういった教育の姿とともに、学びの形もこれまでに囚われず、柔軟に認めていく、それをお互いに理解し合うことを大切にしたいというご意見であったと思います。ありがとうございます。

それでは、福地委員、お願いします。

○福地委員 まず、子どものことと言いますと、この4月から大学内に自分の部屋ができたのですが、あとは全部自分でやりなさいみたいな、とても孤独なんですよ。かつて校長をやっていたときもそうでしたが、私は、披瀝と補完という言葉 これまですごく大事にしている、例えば、今あることを不安に感じたりできなかつたりする中で、これどうしたらいいんだろうと思っていても、それをオープンにできない人もいます。それは披瀝しようよ、そうすればきっと誰かが補完してくれるからと。そうした披瀝と補完の相関関係が、何か安心感につながり、きっと不安を和らげてくれると思うのです。

私がこだわって気にしていることは、データによれば約760人もの不登校のお子さんがいらっしゃるということです。やはり、ここを見ないで次の教育を語っては駄目だと思うのです。どうすれば、この子たちも含めて、全ての子どもたちが自己決定や自己選択できる学びを享受できるのか、先ほど言ったように、本当に一人ひとりが自分自身を正直に披瀝しながら、それを認め合って支え合うような温かい人間関係や、それを受け入れるしなやかな教育環境、もしそれらを課題視しているのであれば、そこに言及していく、そこで苦しむ子どもたちを救っていくというメッセージを公教育の方針として入れていくことがいいんじゃないか、そう思っています。

それから、子どもたちにどうしても必要だなと思っていることが一つあります。誰一人悲しい思いをさせない、よく聞くワンフレーズですね。でもそれを聞くと、必ず100人が100人、いじめ・不登校のことを想起する。その捉えが、全然進化しないんですよ。今、目の前のその瞬間だけを見て、誰一人悲しい思いさせないと言う、言葉の重みってどうなんだろう。私たち教職員の手から離れたときに、その子が将来に亘って、自分が主体的に自分のこととして考えて生きていける力や心を養っていくことこそが、誰一人悲しい思いをさせないということの本質ではないかと思います。今、学生とそんなことを一緒に考えています。でも、なかなかそういった思考が広がらないんですよ。

何が言いたかったかという、ある意味、非常に思考が内向きで、自分のこととして考えたりであったり、視野を広げてこれからの世の中が、そして自分がどういうところに行くのかという先見性であったりなどが足りない。さらにはシチズン・シップとしての自意識。そういったものの萌芽が、やはり小中学校の時代から培われること、将来を見据えた明るい展望で、視野を広げて、生活していくという力を養っていく必要があるのではと思いました。

それから、学校については、やはり先生方が本当に披瀝と補完できるような、温かいコミュニティがしっかりと学校の中であって、それが先生方の安心や学ぶためのモチベーションにもつながっていく、そういった学校組織を整えていかなければならないと思います。同僚性として、学校の中に自分が笑顔で対話ができるコミュニティがちゃんとあって、そこで気兼ねなく話したり、聞いたりできる、そういった姿がイメージできる目標があってもいいかなということは思いました。

最後に、教員は本来研修が好きだと思うのですが、それをどうしてか嫌に感じていたり、負担に思っていたりしている。そこにも問題があって、なぜそうなるのかを考えることも必要だと思っています。

○玉置委員長 ありがとうございます。教員同士のコミュニティの大切さ、同僚性の話でいえば、私もGIGAスクールの関係で様々な学校に関わっていますが、同僚性が高い学校は、本当に全ての先生が、ICTを無理なく使いこなせているんですね。やはりそういった姿も、福地委員のおっしゃったベースでのつながり方があるからこそ、成せるものであるように思いました。

それでは、広瀬委員、お願いします。

○広瀬委員 まず、子どもの観点では、私はやはり幼児教育に携わる立場から、幼児教育の推進というところで、本当に全てのお子さんが生き生きと生活できるような、全ての幼児が健やかに育つような教育や保育の姿が必要だと思っています。

そのうえで、幼児教育から小学校への円滑な接続ということは、とても大事な取組みであると考えています。今、幼小の連携であったり、滑らかな接続ということがよく言われています。実際にこれまでも、幼稚園と小学校のお子さん同士の交流が行われており、今はコロナ禍でオンラインによる交流を行うなど工夫し継続してやっているところではありますが、それだけではなくて、やはり幼児教育に携わる私たちや保育をしている先生方と、小学校の先生方がお互いの教育であったり、保育という部分を理解し合う必要があると思っています。

特に、岐阜市は大変多くの保育園、こども園、幼稚園から一つの小学校に子どもが入学されます。小学校の先生方も、色々な教育や保育を受けてきた子どもたちを1年生でまとめていくのは、とても大変だと思うのです。だからこそ、これまでどういった教育、保育の中で幼時期を過ごしてきたのかを共有し合うことで、小学校の先生方のこれからの指導の一助にもなればと思っています。

また現在、本園もそうですが、特別な支援を必要とするお子さんが実に多くいらっしゃって、公立の幼稚園だと3割近くのお子さんが何らかの支援を必要としておられる状況です。そういった発達的な課題を持つお子さんのほかにも、本日も外国籍の方がお一人、新しく入園されましたが、日本語がほとんど分からないというお子さんもいらっしゃいます。でも、どのお子さんも皆同じで、誰もが生き生きとした生活ができるための環境と支援が必要だと思っています。そういったところも、目標の中に入っているといいのかなと思いました。

あと、学校・教職員のところで働き方改革の話が出ていますが、幼稚園も同じだと思っています。幼稚園は、子どもが早く帰るから時間があると思われるかもしれませんが、現状はとても忙しいです。本園は全職員で支え合いながら、子どもを育てていく姿勢を大切にしています。昔なら、掃除をしながら、子どものその日の様子を話して振り返ったりといったこともよくありましたが、今は本当にそういった

時間もなくなってきていて、どうやって働き方を見直していったらよいか、自分自身でもすごく悩んでいるところでもあります。でもやはり、そもそも教職員の心にゆとりがなければ、子どもたちを心豊かに育てていくのは、とても難しいことだと思っています。

最後に、家庭・地域のところで、幼児期においては、家庭との連携がとても重要だと考えています。先ほどもちょっとお話がありましたように、保護者の方の意識は、すごく教育熱心な保護者から、そうでない方々まで様々です。私たちは、全ての家庭と連携を取っていくことが不可欠ですので、保護者の方々の意識の向上にも取り組んでいかなければと思っています。そのためにも、おたよりや懇談の機会、または家庭教育学級などを通して、保護者に情報提供するなど、保護者の方と一緒に子育てを考えていくということを今も大事にしており、そういったことも位置付けていってはどうかと思います。

また、幼稚園は今、本当に地域の方のご理解・ご協力をいただいております、例えばお茶の会に地域の方に先生としておいでいただくなど、地域の方のお力をお借りすることで、園児たちの経験をより豊かなものにしていくことができるので、今後もそういった取組みを大切にしていきたいと思っています。

○玉置委員長 ありがとうございます。校種を越えて、お互いに教員が知り合うということが、まず理解を深めることのベースでありますし、それから地域の方々に園の活動に関わってもらうことで、ご自分が役に立っているという高揚感を生んでいき、それが更なる応援に増幅されていく、そういった視点がとても大事で、そこにもつなげる目標を入れていきたいというご意見であったかと思います。

それでは、青山委員、お願いします。

○青山委員 先日、本校の今年度第1回の学校運営協議会がありました。毎年第1回で、校長先生から学校運営方針をお示しいただくのですが、今年から本校は宿題をやめますという話をされました。この話は、個別最適な学びや働き方改革にも繋がるのかと思いますが、学校運営協議会にも保護者の方が何人かいらっしやって、当然、心配されます。子どもは宿題が無くなって喜んでいるけど、私らどうすればいいの、子どもが遊んでしまうから困ると言う。でも、地域のOBの方々はそんなことないと言う。野山を駆け回ることも大事だし、他にもっと色々大切なことがあって、その子の特性を伸ばしてあげられるようなこともある、思わぬ才能を発揮するかもしれない、そういうことを言う。宿題が無くなったから、特に何もやらなくていいって話ではなく、その子一人ひとりが自分のやりたいことを見つけて、それをやっていくのが望ましいという話なんだと思います。

そのとき、さらに話に出たこととして、これを心配だと言う保護者はきっと大丈夫だと思うが、保護者の中には全く関心すらない人もいるだろうということです。ある委員から、学校としてそういった家庭にはどう対応するんだと質問が出たのですが、私は、いやそれは違う、学校がどうするかではなく、そうした子どもがいたらどうするかを話し合う場がここであって、皆で何とかしなければいけないとい

うことを述べました。

最終的には、とりあえず宿題を無くすことにチャレンジする。きっと色々な効果が期待できると思いますが、もしかしたら先生は、楽になるのではなく、逆に面倒になるかもしれない。でもこれは、地域なり、保護者なり、私たちを信じてやってくれているのだから、一緒になってやっ払いこうとなりました。そういう学校の立場も理解し、もしそういったセーフティネットが必要になれば、もう一度ここで話し合っ、地域と保護者で何とか支えていこうという話になったんですね。

学校が何かをやろうとしたときに、共に活動できる、そういう場を共につくってくれることが大事で、やはりコミュニティ・スクールがそうした活動の中心になっていかなければならないと思います。私は、地域の持つ可能性や力を信じて、もっと地域に役割や負担をかけてもいいのかなと思っています。

○玉置委員長 ありがとうございます。エピソードを語っていただいたことで、とても良い話し合いが行われている様子を具体的に知ることができました。やはり子どもの姿を中心に考えて、ここを基に皆様が話し合い、共通の解釈ができていったならば、計画もより実のあるものになっていくのではと改めて思いました。

まだ若干の時間がありますが、さらにご意見がありましたらどうぞ。荒木委員、お願いします。

○荒木委員 先ほどの、家庭、家庭教育にどの程度言及していくかという点について、補足として。

子どもが幼稚園に通っていた時、幼稚園が主催する「おやじの会」に、夫が参加していました。私が積極的に行くよう言っていたので、当初はさほど乗り気でなかったかもしれません。当時、本当に立ち上がったばかりで、まさに第1回目のおやじの会です。そこで突然、じゃあお父さんたちで話し合っ、子どもを話してください、そう園長先生に言われるのですが、話がなかなか盛り上がりません。

翌年、園長先生の提案で、サンドイッチを作って皆で食べようという会に変えられまして、その結果、お父さんたちがサンドイッチを作る中で、ようやく何か話せる雰囲気が出てきた。父親同士と一緒に何かやったという雰囲気が心を許すのか、何となく話してもいいかな、そんな感じになっていったようです。先ほども話に出たように、何かを一緒に作るということであれば、皆それぞれの役割が見えるわけです。それは、親がどのように子どもの教育の場、学びの場に入っ、いったらいいのかについても同じで、いきなりやってみましようというのは、やはり難しく、まずはこんなことを一緒にやっ、知り合いましよう、そこから話を始めましようというところがあるとよいなと思いました。

今は無いですが、市民運動会ってすごいよかったなと思うんです。洗練されたスポーツではないけれど、近所の顔しか知らないおじさん、おばさんが頑張っ、どたばたやっている。そんな姿を子どもが見て、ちょっと参加してみる。何かそれだけで、少しつながることができた、そういった思いが持てるの

です。すごく難しい課題ではなくて、余力のおすそ分けのような心構えで、気楽に楽しく参加できて、自分にも周りにもいいことがある、そんな活動があるといいのかなと思いました。

そしてまた、私の父が囲碁を教えに行っていた話ですが、ある学校の先生から決められた短い時間内で、囲碁と将棋とオセロをそれぞれ教えてほしいとお願いされ、困ったと言っていたことがありました。おすそ分けしたくて行っているところで、おすそ分けの仕方が混乱するのはやっぱりよくないと思うので、それも気楽に話し合える、先ほどあったように、困っているとちゃんと言い合える関係ができていくといいのかなということを思いました。

○玉置委員長 ありがとうございます。一緒に活動することによりそういう関係が生まれてくる、そういった仕掛けをつくっていったらというご提案だったと思います。続いて、長谷川委員、お願いします。

○長谷川委員 現行計画は、社会の中で子どもたちがどう生きていくか、子どもたちの個性、能力をどう伸ばすか、そしてそれとは別でもう一つ社会教育の項目立てがありました。

今回は、この構造が変わることになります。私はこれを見たとき、それぞれの領域の接続部分をどうこの中に入れていくのが大事な発想だと思いました。つまり、子ども、学校・教職員、家庭・地域がそれぞれ完全に分かれるのではなく、子どもと学校や先生方がやはり一緒に取り組んでいく部分であったり、先ほどのとおり、一概に家庭とだけ言ってしまうと、様々なご事情がある中でできるところ、できないところが当然出てくるわけです。しかし学校と家庭が、地域と家庭がどのように連携しながらやっていくか、そういった組合せの部分のようなものがこの目標の中に入ってくることができればよいのではないかと思います。縦割りではないですが、その連続感みたいところをどう担保するのが少し気になったので、今後の策定のプロセスの中でそこを少しご検討いただけると、縦割り感が少し緩和し、現実に即したものとなっていくのではないかと思います。

○玉置委員長 ありがとうございました。次回に向けて、事務局への一つの提言であったかと思います。確かに、皆様のご意見を聞きながら、これを子どもの目標として括するには少し幅が広く、他にも重なっていく、オーバーラップする部分があるなと思うものもありました。もちろん、どこが主軸になるかはありますが、その辺りの重なりを表現していくため、何か考えていただけるといいのではないかなと思います。では最後に、福地委員、お願いします。

○福地委員 今、長谷川委員のお話を聞いていて思ったのですが、本学に以前、京都の教員採用試験を受験した学生がいました。その理由を聞いたら、京都はまちの文化財や文学的な歴史資源といった特色を活かし、博物館と連携した学びを充実させている、自分も社会科の教員としてその学びに関わりたい、

自己実現したいと言っていました。すごいなと思いました。

私は、県内の中でも岐阜市にはそういった誇れる地域資源や、人が集う文化や情報の拠点などが結構集まっていると思うのです。それらが学校教育と明確に住み分けされてしまうのは勿体ないと思うし、その変わりから、豊かな子どもたちの学びを生み出せるといいなと思いました。

○玉置委員長 学校と社会をつないだ学びの可能性、岐阜市の持つ可能性について、大事なことを言っただけでした。ありがとうございました。

皆様にご協力いただき、大変多くのご意見を頂戴できたことを嬉しく思います。本日の審議事項について十分に意見を出すことができたと思いますので、進行を事務局へお返しさせていただきます。皆様、ありがとうございました。

○野田次長兼教育政策課長 玉置委員長様、それから委員の皆様、ありがとうございました。

それでは、続きまして、次第の6 その他といたしまして、次回会議のご案内を事務局よりさせていただきます。次回、第2回岐阜市教育振興基本計画検討委員会は、8月19日金曜日、13時30分から、庁舎北側でございます、みんなの森ぎふメディアコスモス かんがえるスタジオにおいて開催したいと考えております。詳細につきましては、改めて各委員の皆様にご連絡申し上げます。

それでは、本日の会議の閉会にあたりまして、教育委員会事務局長よりごあいさつ申し上げます。

○佐藤事務局長 教育委員会事務局長の佐藤でございます。本日は長時間に亘り、皆様から多様な、そして貴重なご意見をいただきました。誠にありがとうございました。

次回の会議では、本日いただきましたご意見を参考にさせていただきます。具体的な目標について事務局からお示しできるのではないかと考えております。

本市の教育を今後もより一層推進していくため、何より子どもたちの幸せな未来のために、この計画をしっかりと作っていただき、子どもたちを幸せにしていきたいと思っております。引き続き、委員の皆様には本計画の策定にお力添えをいただきますよう、よろしく願いいたします。本日は誠にありがとうございました。

○野田次長兼教育政策課長 それでは、以上をもちまして、第1回岐阜市教育振興基本計画検討委員会を閉会させていただきます。本日は誠にありがとうございました。